“黒”の読音をめぐって

大　島　吉　郎

A Phonological Study of the Chinese Character “黒”

OSHIMA Yoshiro

提　要：“黒”字曾经在北方官话里有个读音念成／he／第四声。当代主要字典却都把这个读音删去，只收／hei／第一声。本文就此“黒”字语音指出韵母变化在现代汉语方言中的具体表现，同时描写这个现像在“北”字读书音和语音上有同样的局面。通过“黒”字、“北”字和其他几个入声字语音的讨论，本文拟对介词“给”字语音／gei／产生的过程提出一个假设请诸位批评指正。

关键词：语音　读书音　“黒”　“给”　入声　ei 韵母

目次

0　はじめに
1　現代漢語方言における“黒”の読音
2　中古音における“黒”の読音
2．1《廣韻》
2．2《集韻》
2．3 小結
3　音韻変化をどう考えるか
3．1《京音字彙》
3．2《中華新韻》
3．3 小結
4　おわりに
　注
　引用文献
　参考文献
　付表

0　はじめに

現代中国語、所謂“普通話”の音韻体系の中で、“给”／gei／（以下“汉语拼音方案”による表音をこのように示す）の構造が異質であることは広く認識されているが、“给”同様、“黑”の読音（口語音）も特殊な側面を持つことは従来あまり注意されてはいない。

介詞用法としての“给”について用例を確認し得るのは清代以降である[1]。しかし“给”の口語音／gei／が、どこの基礎方言から、どのような過程を経て北方官話に定着したのか諸説行われてはいても、まだ定説を得るに至っていない。この問題を考える上で、同じ韻母を有する“黑”の読音についての理解を深めることは、間接的ではあっても一つの重要な意味を持つものと考える。

舌根音の声母 g、k、h と韻母／ei／の結びつきによる音節は舌歯音 z、c、s の場合同様、“普通話”において体系的でない、つまり音節表の中で整合性を欠くことは明らかである。《新华字典》2004年刊第10版では／kei／について“剋”を記載し＜方＞とする[2]。／hei／は“黑”の他に“嘿”、“镶”、“嗨”の三文字を挙げるのみで、“嘿”“嗨”は間投詞、“镶”は放射性元素 Hs を表すために新に考案されたもので、このような状況からも、これらの音節が生産性に乏しい（ある特定の文字のためにだけ存在する）ことが見て取れる[3]。例えば、

gei：给
kei：剋
hei：黑、镶、嘿、嗨

“嘿”には元来「“默”と同義」として／mo／という読音も行われており、用字法からは假借という関係と考えられるが、／hei／との関わりは一考に値する。

小稿では“黑”の読音に対する現代漢語方言と中古音からの考察を通して、音韻変化の通則性、韻母／ei／の性質、“给”の読音の特徴から推測される来源の推定を試みるものである。

1　現代漢語方言における“黑”の読音

まず《普通话基础方言基本词汇集》第５冊《普通话基础方言基本词汇对照表》“(28) 形容词”における“黑”の記述を見てみることにしたい[4]。93 箇所に上る同書の調査地点から得られる“黑”の読音に対して、おおよそ次のような分類が可能である[5]。開口呼は単韻母と二重韻母に分けることとする。例えば、

（１）非入声

１）開口呼：[xei]32箇所、[xai]３箇所、[xaɛ]１箇所
[xe]10箇所、[xɣ]９箇所、[xɛ]７箇所、[xə]４箇所、[xæ]２箇所、[xɔ]１箇所、

2）合口呼：[xɯ]３箇所

（２）入声（声門閉鎖音）：[xəʔ]13箇所、[xɛʔ]３箇所、[xɐʔ]２箇所、[xʌʔ]１箇所、
[xeʔ]１箇所、[xaʔ]１箇所、

“黒”の読音が／hei／（[xei]）である地域は約三分の一を占めるに過ぎず、入声韻尾（声門閉鎖音）を伴う地域も21箇所存在する。「黒」の日本漢字音が「コク」であるところから、“黒”はそもそも入声であったことは容易に想像がつく。上記の様々な読音の有りようは、入声消滅、音韻変化の過程が各地の方言に痕跡として残されていると考えることもできよう。一方で、“黒”の読音がなぜ二重母音／hei／であらねばならないのかという疑問が新たに浮かび上がってくる。非入声のタイプで単母音から音節を構成する地域は36箇所に上り、二重母音の地域と拮抗している点も解釈が求められて然るべきである。

1955年２月初版《同音字典》、同じく1956年５月新第１版《同音字典》には／hei／第１声とともに、“另見”として／he／第４声を示し、“讀音”と注記する。“讀音”は口語音に対する「文言音」あるいは「読書音」と考えてよいものであり、“又音”とは性質を異にする。同書（初版）／bo／の項に例えば“讀音”として“剥”“白”“柏”“百”“佰”“雹”“蔔”“荸”“北”などの字が挙げられているが、いずれも「文白異読」の例であり、入声字の占める割合が高い。

人民教育出版社1953年刊《新华字典》では“黒”について／hei／の“讀音”として／he／を併記するものの、1957年６月商務新一版では／he／の記述を行っていない。一般の利用を目的とした字典における“讀音”の整理は“普通話”制定の方向に沿った言語政策的措置であると考えてよいであろう。

2　中古音における“黒”の読音

次に中古音における“黒”の読音について、《廣韻》及び《集韻》を中心に検討してみることにしたい。

2．1　《廣韻》

《廣韻》における“黒”の反切下字は“北”であり、“北”の反切下字は“墨”である。例えば、

入聲卷第五・德第二十五：“黒”呼北切
入聲卷第五・德第二十五：“北”博墨切
入聲卷第五・德第二十五：“墨”莫北切
入聲卷第五・德第二十五：“德”多則切
入聲卷第五・德第二十五：“則”子德切

《廣韻》の体系においては“黒”、“北”、“墨”は「入聲卷第五・德第二十五」の同一韻である

ことが確認できる。“黒”を偏旁とする“黙”は“墨”と同韻に属し、反切も共通する。

2．2 《集韻》

《集韻》における“黒”の反切下字は“得”であり、“得”の反切下字は“則”である。例えば、

巻之第十・入聲下・德第二十五：“黒”迄得切
巻之第十・入聲下・德第二十五：“得”的則切
巻之第十・入聲下・德第二十五：“則”即得切
巻之第十・入聲下・德第二十五：“北”必墨切
巻之第十・入聲下・德第二十五：“墨”密北切
巻之第十・入聲下・德第二十五：“德”的則切

《集韻》の体系における“黒”“得”“則”の反切下字は「巻之第十・入聲下・德第二十五」の同一韻であることがやはり確認できる。“黙”は《集韻》においても“墨”と同韻であり、反切を同じくする。

2．3 小結

入声が消滅した北方官話において、では各字音がどのように変化しているか見ておくことにしたい。“讀音”を古層と考え、対比してみることにする。併せて“没”についても取り上げる[6]。

“黒”：(heʔ) → he → hei
“北”：(boʔ) → bo → bei
“黙”：(moʔ) → mo
“墨”：(moʔ) → mo →(mei)
“没”：(moʔ) → mo → mei
“得”：(deʔ) → de → dei
“則”：(zeʔ) → ze
“德”：(deʔ) → de

通則性から考えれば、入声韻尾を失った現在の韻母は／e／、／o／いずれかであることが想定される。異なる韻母に分かれるのは／be／、／ho／、／do／、／zo／などの音節が成立し得ないからに他ならない。想定しにくい／ei／は何らかの理由で、文言音とは異なる次元から合流してきた韻母である可能性が高い[7]。

元来入声字でありながら、“普通話”では／ei／韻母を伴うものに“賊”が挙げられる。中古音では“黒”と同韻である。例えば、

《廣韻》入聲巻第五・德第二十五：“賊”昨則切
《集韻》巻之第十・入聲下・德第二十五：“賊”疾則切

1937年刊《汉语词典（簡本）》では／ze／、／zei／ともに挙げ、1952年刊《学文化字典》、1955年刊《同音字典》は／ze／を“讀音”とする。“賊”の語義が貶義を中心とすることに注意が払われるべきであると考えるが、これと同時に、／ze／が審音の過程で消滅した理由は“黒”に関する措置と関連性があるものと想像される。両者の対応関係は明確である。例えば、

“黒”：(he?) → he → hei
“賊”：(ze?) → ze → zei

“黒”は現在／hei／第1声のみであるが、かつて“黒豆”という語についてのみ第3声に発音されていた特殊な事情を有している[8]。官話としての普遍性を有していたのか、どのような範囲に通用していたのか検証を要する。

上記に引用した漢語方言の諸相は、このような状況を反映していると考えられる。

3　音韻変化をどう考えるか

3．1　《京音字彙》

現代の多くの字典に記述されている“剋”は／ke／、／kei／の音を有する。しかし字典に／kei／が記述されるようになるのは比較的最近のことである[9]。《京音字彙》初版は宣統辛亥（1911年）正月刊。この資料に／kei／は記述がない。小稿で取り上げた字音が同書でどのように記録されているか見てみることにする（下線部筆者）。

“黒”HÊ（去聲）：部首火，所熏之色也。北方陰色也。<u>又音禾危</u>。
“黒”HEI（上平）：<u>此俗音也</u>。已詳八四頁。
“黒”HEI（上聲）：黒豆也。
“北”PO（去聲）：詳見一零三頁。
“北”PEI（上聲）：匕部，朔方也，北伏也，陽気伏于下，時爲。又奔也。<u>又音擘</u>。
“賊”TSÊ（去平）：詳見一四九頁。
“賊”TSEI（下平）：貝部，<u>此系俗音</u>，<u>本音簀</u>，害也，偷盗也。
“給”CHI（上聲）：糸部，贍也，供給也。<u>餘詳戈危音</u>。
“給”KEI（上聲）：糸部，与也。<u>此俗音也</u>。
“剋”K'E（上平）：刀部，剋勝也。又必也，急也，又剋期約定日期也。<u>又去聲</u>。

“剋”についてのみ読音が／ei／韻母の事例に関する記述が見られない。《北京方言词典》、《北京话语词汇释》、《北京土语辞典》などによれば北京方言であることは明らかであるが、清末においてはまだ明確な注意がはらわれていなかった可能性がある。この一語のためにだけ字典に音節の項目が与えられるべき何らかの重要な理由があるとしたら、今後“普通話”への浸透の可能性も考えられるが、他方、果たしてそうなのか疑問も残る[10]。

次に、“黑”の対義語の一つに“白”を挙げることができる。“白”との相対的関係から音韻変化の理由の一端を考えてみたい。例えば、

“黑”：(heʔ)→he→hei
“白”：(boʔ)→bo→bai

“黑”は／hai／へ、また“白”は／bei／への変化を遂げることもできたはずである[11]。しかし“黑”は／hei／を選択したわけであるが、その理由の一つとして“北”が／bei／を選んだことと共通する点があるように想像される。同義関係にある“敗”との相対的関係に着目してみたい。例えば、

“北”：bo、bei
“敗”：bai

“黑白”は／heibai／、“敗北”は／baibei／であり、同韻を避ける効果が得られての結果ではなかろうかと推測される。“百”が／－ei／を排除して／－ai／を選択したのも合理的な理由があるものと考えられる[12]。

3．2 《中華新韻》

《中華新韻》は教育部國語推進委員会編、中華民国30年10月に公布された字音資料である。“讀音”と“語音”を明確に分け、入声を認めている（下線部筆者）。

“黑”：三歌・入去・<u>讀音</u>、八微・陰平・<u>語音</u>
“北”：二波・入去・<u>讀音</u>、八微・上・<u>語音</u>
“墨”：二波・入去
“得”：三歌・入陽平、八微・上・<u>語音</u>
“則”：三歌・入陽平
“德”：三歌・入陽平
“賊”：三歌・入陽平・<u>讀音</u>、八微・陽平・<u>語音</u>
“剋”：三歌・入去（“克”“尅”のみで“剋”については記述なし）

“給”：七齊・入上、八微・上・語音

これに対して《増注中華新韻》は中國大辭典編纂處編（黎錦熙主編）、1950年７月商務印書館刊。《中華新韻》の内容を基礎に、抜け落ちていた見出し字（例えば“被”）を補うと共に、若干の用例を加えたもので、体系に変化は見られない。

“黒”：三歌・入去・〔原註〕讀音、八微・陰平・〔原註〕語音
“北”：二波・入去・〔原註〕讀音、八微・上・〔原註〕語音
“墨”：二波・入去
“得”：三歌・入陽平、八微・上・〔原註〕語音
“則”：三歌・入陽平
“德”：三歌・入陽平
“賊”：三歌・入陽平・〔原註〕読音、八微・陽平・〔原註〕語音
“剋”：三歌・入去（“克”“尅”のみで“剋”については記述なし）
“給”：七齊・入上、八微・上・〔原註〕語音

ここから《同音字典》編纂（中國大辭典編纂處編）に至る過程で、入声に対して大幅な見直しが検討されたことは疑う余地がない。入声の処理に関して体系の根幹に関わる重要な変化が生じているが、“讀音”に対しては記述を残し、教育面における効果を期待してか、ある一定の配慮を試みている。

３．３　小結

／kei／が辞書に登場するのは《現代汉语词典（试用本）》（1973年５月初版）からのようである。同書編纂に深く関わった丁声樹氏編録の《古今字音対照手册》／ei／韻の項に／kei／は収録されていない。方言調査を目的に作られたこのハンドブックに、／kei／という音節は調査の基準としない（一般性を欠く）という判断だったと考えられる。では翻って《現代汉语词典（试用本）》に“剋”を立てた理由が必要となるが、／gei／、／hei／との整合性（体系）を考慮しての結果ではないかと推測される。北方方言における“诶”／ei／、“呗”／bei／、“嘞”／lei／、“这”／zhei／、“那”／nei／、“哪”／nei／、“谁”／shei／などの口語音が広く受けいれられ、“黒”／hei／、“給”／gei／、“賊”／zei／なども定着し、／kei／を受け入れる素地が整ったことによるという解釈が成り立つのではなかろうか。

４　おわりに

《普通话基础方言基本词汇对照表》“(26) 方位词”に極めて興味深いデータが示されている。入声（声門閉鎖音）韻尾を伴う地域について見てみると、“北”の調査結果が一箇所を除き

“黒”と一致するのである。例えば、

（1）非入声

1）開口呼：[pei]37箇所、[pie]1箇所、[pia]1箇所、
[pai]2箇所、[paɛ]1箇所、[pe]11箇所、[pɣ]7箇所、[pɛ]4箇所、[pə]4箇所、
[po]1箇所、[pɔ]1箇所、[pæ]2箇所

2）合口呼：[pu]1箇所

（2）入声（声門閉鎖音）：[piəʔ]7箇所、[pieʔ]2箇所、[piɛʔ]1箇所、[piɐʔ]1箇所、
[pəʔ]3箇所、[pɔʔ]2箇所、[peʔ]2箇所、[pɐʔ]1箇所、[poʔ]1箇所

異なる地域は陝西省綏德。例えば、

“黒”：[xəʔ]
“北”：[pie]

入声地域は“黒”が21箇所であるのに対して“北”は20箇所となる。

韻母細部については差異の見られる地域もあるが、おおよそ対応関係を認めることが可能であり、音韻変化の規則性を確認することができる。官話地区における“黒”と“北”の音韻変化は同時進行的であり、方向性を同じくしているといえよう（[付表] 参照）。

最後に“給”の字音／gei／をどう考えるかについて試案を提示して、小稿を締めくくることにしたい。

“給”の中古音が入声である点は“黒”と共通である。例えば、

“給”《廣韻》入聲卷第五・緝第二十六：居立切（供給、又姓、出姓苑）
“立”《廣韻》入聲卷第五・緝第二十六：力入切
“入”《廣韻》入聲卷第五・緝第二十六：人執切
“執”《廣韻》入聲卷第五・緝第二十六：之入切
“給”《集韻》卷之第十・入聲下・緝第二十六：訖立切（説文相也、亦姓）
“立”《集韻》卷之第十・入聲下・緝第二十六：力入切
“入”《集韻》卷之第十・入聲下・緝第二十六：籍入切
“執”《集韻》卷之第十・入聲下・緝第二十六：質入切

次に、“普通話”において／ei／韻母を有する“被”について見てみることにしよう。両者が意味の上においても強い関連性を有していることは贅言を要しない。例えば、

“被”《廣韻》去聲巻第四・寘第五：平義切
“義”《廣韻》去聲巻第四・寘第五：宜寄切
“被”《集韻》巻之七・去聲上・寘第五：平義切
“義”《集韻》巻之七・去聲上・寘第五：宜寄切

中古音では“寘”韻に属し、現代音に至る過程で変化を生じている。“給”の入声“緝”韻から上声／ei／韻に至る過程は、“黒”、“北”、“被”などの語がたどる軌跡と重なるのではないかと推測される。／ei／韻の来源と、その本質的な意味も併せて明らかにする必要がある。

意味の関連する語は音韻的にもつながりを有することが窺える。“給”と類義関係にある語を見てみることにする。例えば、

／-ai／	／-ei／	／-i／
代		
(替)	(替)	替
	爲	(爲)
	被	(被)
	歸	(歸)
	饋	(饋)
		(己)
	給	給

“爲”は日本漢字音で「ヰ」。“替”は呉音は「タイ」、漢音では「テイ」。“饋”は漢音で「キ」。語の用法、意味は実詞から虚化した機能語としてだけとらえるのではなく、音韻変化の結果を表記するための假借としての側面も同時に併せ持つのではなかろうかと考えるのである。

一方、“黒”との関連性で“給”を考えてみることができる。例えば、

“黒”：(heʔ) → he → hei
“剋”：(keʔ) → ke → kei
“賊”：(zeʔ) → ze → zei

このような対応関係のパターンが設定できるなら、

“給”：(geʔ) → ge → gei

を想定することが可能であろう。／ge／は“合”に通じ、“合”は“和”に通じ、“和”は同義語として“與”に通じる。“合”は中古音において入声である（《廣韻》で「入聲卷第五・合第二十七：侯閤切、又音閤」）ため、音韻変化の条件に合致するといえよう。すなわち、

與→和→合→給

“給”は／ge／から／gei／への音韻変化の過程で生み出された表記の一種であると考えることができるのではなかろうか[13]。

／ge／について考えるとき、“自己”が漢語方言音によっては“自个儿”に変異する現象が想起される[14]。例えば、

自个儿[tsɿ kər]：北京、天津、承德、保定、石家庄、平山、张家口、长治、济南、西安、阜阳、徐州

自个儿[tsɿ kʌr]：邯郸

自个儿[tsɿ kɣr]：阳原、赤峰、海拉尔、黑河、齐齐哈尔、哈尔滨、佳木斯、白城、长春、通化、丹东、锦州、大连、烟台、原阳

自个儿[tsɿ kɣɯ]：兰州

（《普通话基础方言基本词汇对照表》“(27) 指代词”所收“自己”）

“个”が“己”に等しいとの推論に立てば、《醒世姻緣傳》に現れる“己”はまた“合”の変異であると見なすことも可能であろう。単純化しすぎるとの謗りを免れないが、一つの考え方として、“給”に関する語彙交替、音韻変化のプロセスを以下のように想定することができるのではないかと考える[15]。

與 → 和
　　和 → 合
　　合 → 己
　　己 → 給

“給”の介詞用法が実際に“合”、“和”とどのような並行、分布関係にあるかは稿を改め報告することにしたい。

注

(1)太田辰夫『中国語歴史文法』第2部「17介詞」の項参照。“給”の異体字表記として“歸”(《五代平話》)、“饋”(《朴通事上》)、“己”(《醒世姻縁傳》)の例を示す。

(2)《现代汉语词典》1973年刊試用本から第2版まで“剋”に<口>の記号を付す。第3版、第4版は<口>を取り、第5版で<方>とする。語彙項目“剋架”は試用本以来一貫して<方>とする。

(3)《新华字典》第10版には繁体字、異体字を含め“10000余字”を収録する。

(4)pp.4491参照。

(5)本来声調についての記述もあるが、小稿では考慮しないこととする。

(6)“没”は《廣韻》入聲巻第五・没第十一、莫勃切。《集韻》入聲上・没第十一、莫勃切。/mo/、/mei/二つの音を有する点においては共通の事例である。《京音字彙》では「“没”MU(下平):水部,沈也,又終也,与歿同。又音莫,又俗音讀眉。」との記述を行い、/mu/を正音と位置づけ、/mo/、/mei/を“又音”あるいは“俗音”として退ける。

(7)このような傾向は“墨”にも当てはまる。[mei]は方言音で広い地域、例えば、保定、滄州、臨汾、青島など19箇所に分布しており、音韻変化の方向性から言えば、北方官話における口語音は/mei/である蓋然性が高い。《普通话基础方言基本词汇对照表》“(21)学校、教育”の項目“墨盒儿”p.4010参照。

(8)例えば1937年刊《汉语词典(简本)》“黑豆”の項目p.423参照。/hei/第3声の記述を行うのは、北京師範大学中国大辞典編纂処編1952年刊《学文化字典》までであり、《同音字典》1955年初版では記載がない。《新华字典》も1953年初版からすでに記述が見られない。初出については十分な調査を行う必要があるが、廣部精編輯『亞細亞言語集支那官話』(明治廿五年五月九日印刷再刻出版、青山堂)「巻之六平仄篇」(1892年刊)に記述が見られる。/gei/も第3声であることは注目に値するのではなかろうか。《北京土语辞典》は“北京话‘黑’变调”と指摘する(p.174)。

(9)字典ではないが『亞細亞言語集支那官話』「巻之六平仄篇」に“刻”として「ケイ」の音をつけ、“是刻搜之刻”と記述する。声調は「上平」。『岩波中国語辞典』は“摳 kēi〔動〕1”とし、「ややくだけた言いかた(いわゆる北京語)」であると認定する。

(10)“剋”は“剋架”としても用いられるが、内容は貶義(“打架”)を中心とする点はやはり興味深い。《北京土语辞典》は“剋”/kei/について“‘剋’kè 字借用,变读”と指摘する(p.222)。

(11)“白”は《廣韻》で“入聲巻第五・陌第二十”に属し、反切は“傍陌切”。《集韻》では“巻十・入聲下・陌第二十”で“博陌切”。

(12)実際に[pei]と発音される地域が見られる。例えば、

“敗”:張家口、陽原、臨河、集寧、銀川

(《普通话基础方言基本词汇对照表》“(4) 人品、职业”所收“败家子儿”)

“百”：青島、諸城、濟南、濟寧、商丘、漢中、西安、宝鷄、天水、敦煌、西寧、哈密、烏魯木齊

(《普通话基础方言基本词汇对照表》“(12) 服饰、穿戴”所收“百家锁”)

(13)《普通话基础方言基本词汇对照表》“(30) 介词”の“给”における記述は興味深い。例えば、

[kɛ]：成都、南充、安慶、徐州

[kə]：長治、昆明、連雲港

[kɛ]：二連浩特、西昌、

“黑”、“北”に比べると、地域ははるかに少ない。[kei] への移行がこの二つより早い段階で始まったとの推定が可能である。そのことは入声（声門閉鎖音）を伴う例が見られない点を証左とすることができるのではなかろうかと考える。

(14) 太田辰夫1958「12.6.6《自個兒》」に「《個》は上聲」と指摘し、《自家》から変化したものであるとする。《漢語大詞典》第8冊 p.1324〔自個兒〕の項には《兒女英雄傳》第5回の例を挙げるが、光緒四年北京聚珍堂活字本《兒女英雄傳》には“自己各兒”とし、《漢語大詞典》が使用するテキストには問題が見受けられる。

(15)“合该”が“活该”に変異する事例からも、“合”と“和”の関連性の深さを窺うことができる。

引用文献

《校正宋本廣韻》、1976年艺文印书馆。

《集韻》、1985年上海古籍出版社。

《京音字彙》王璞撰、宣统辛亥正月初版。

《漢語詞典（簡本)》、1937年3月版、1977年1月重版商務印書館香港分館。

《中華新韻》教育部國語推行委員会編、1941年公布。

《增注中華新韻》中國語大辭典編纂處編、1950年商務印書館。

《学文化字典》北京师范大学中国大辞典编纂处编、1952年商务印书馆。

《同音字典》北京师范大学中国大辞典编纂处编、1955年五十年代出版社。

《同音字典》中国大辞典编纂处编、1956年（新1版）商务印书馆。

《同音字典》中国大辞典编纂处编、1957年（第2版）商务印书馆。

《新华字典》新华辞书社编、1953年人民教育出版社。

《新华字典》新华辞书社编、1957年商务印书馆。

『亞細亞言語集支那官話』廣部精編輯、明治十三年八月出版、明治廿五年五月九日印刷再刻出版、青山堂。

参考文献

太田辰夫　1958　『中国語歴史文法』、江南書院（1981年朋友書店景印）。

陈章太·李行健　1996　《普通话基础方言基本词汇集》、语文出版社。

北京大学中国语言文学系语言学研室　1995　《汉语方言词汇（第二版）》、语文出版社。

丁声树　1958　《古今字音对照手册》、科学出版社。

陈刚　1985　《北京方言词典》、商务印书馆。

宋孝才　1987　《北京话语词汇释》、北京语言学院出版社。

徐世荣　1990　《北京土语辞典》、北京出版社。

徐从权　2007　《《现代汉语词典》音节表研究》,《汉语学习》第３期。

黄灵燕　2007　《罗马字官话圣经译本的拼写系统：《新约全书》和《约翰福音书》拼写比较》、《语言研究》第２期。

［付表］（《普通话基础方言基本词汇对照表》を基に大島が作成）

北京	[xei]／[pei]	丹东	[xɣ]／[pei]	西昌	[xɛ]／[pɛ]
天津	[xei]／[pei]	锦州	[xei]／[pei]	自贡	[xe]／[pe]
承德	[xei]／[pei]	大连	[xɣ]／[pɣ]	重庆	[xe]／[pe]
唐山	[xei]／[pei]	烟台	[xɣ]／[po]	昭通	[xə]／[pə]
保定	[xei]／[pei]	青岛	[xei]／[pei]	大理	[xe]／[pe]
沧州	[xei]／[pei]	利津	[xei]／[pei]	昆明	[xə]／[pə]
石家庄	[xei]／[pei]	诸城	[xei]／[pei]	蒙自	[xə]／[pɔ]
邯郸	[xʌʔ]／[pieʔ]	济南	[xei]／[pei]	遵义	[xæ]／[pæ]
平山	[xaɛ]／[paɛ]	济宁	[xei]／[pei]	毕节	[xai]／[pai]
张家口	[xɐʔ]／[piɐʔ]	商丘	[xɛ]／[pei]	贵阳	[xɛ]／[pɛ]
阳原	[xəʔ]／[piəʔ]	林县	[xɐʔ]／[pɐʔ]	黎平	[xɛ]／[pɛ]
大同	[xəʔ]／[piəʔ]	原阳	[xai]／[pei]	柳州	[xɣ]／[pɣ]
忻州	[xəʔ]／[piəʔ]	郑州	[xɛ]／[pei]	桂林	[xə]／[pə]
离石	[xəʔ]／[piəʔ]	灵宝	[xɯ]／[pei]	吉首	[xei]／[pei]
太原	[xəʔ]／[pieʔ]	信阳	[xɛ]／[pɛ]	常德	[xe]／[pe]
临汾	[xɯ]／[pu]	白河	[xe]／[pei]	宜昌	[xɣ]／[pɣ]
长治	[xaʔ]／[pəʔ]	汉中	[xei]／[pei]	襄樊	[xɣ]／[pɣ]
临河	[xɛʔ]／[piɛʔ]	西安	[xei]／[pei]	天门	[xɣ]／[pɣ]
集宁	[xəʔ]／[piəʔ]	宝鸡	[xei]／[pei]	武汉	[xɣ]／[pɣ]
呼和浩特	[xəʔ]／[piəʔ]	绥德	[xəʔ]／[pie]	红安	[xæ]／[pæ]
赤峰	[xei]／[pei]	银川	[xɯ]／[pia]	安庆	[xe]／[pe]
二连浩特	[xəʔ]／[piəʔ]	天水	[xei]／[pei]	阜阳	[xɛ]／[pɛ]
海拉尔	[xei]／[pei]	兰州	[xɣ]／[pɣ]	芜湖	[xəʔ]／[pəʔ]
黑河	[xei]／[pei]	敦煌	[xei]／[pei]	合肥	[xəʔ]／[pəʔ]
齐齐哈尔	[xei]／[pei]	西宁	[xei]／[pei]	歙县	[xeʔ]／[peʔ]
哈尔滨	[xei]／[pei]	哈密	[xei]／[pei]	徐州	[xe]／[pe]
佳木斯	[xei]／[pei]	乌鲁木齐	[xei]／[pei]	连云港	[xə]／[pə]
白城	[xei]／[pei]	成都	[xe]／[pe]	涟水	[xəʔ]／[pɔʔ]
长春	[xei]／[pei]	南充	[xe]／[pe]	扬州	[xəʔ]／[pɔʔ]
通化	[xei]／[pei]	达县	[xe]／[pe]	南京	[xɛʔ]／[peʔ]
沈阳	[xei]／[pei]	汉源	[xai]／[pai]	南通	[xɛʔ]／[pəʔ]